

「生と死の教育の必要性」Ⅱ

—キリスト教の死生観、特に死についての考え方との関連で—

岡 本 富 郎

Ⅰ. 問題の所在と研究の目的

子どもに対する殺人、「ただ殺したい」という動機で殺す事件、親族殺人、交通事故による「死」、自然災害による「死」、また、火災による「死」、さらに言えば3万人にも及ぶ自殺等、国内での死に関する報道が後を絶たない。また目を海外に向ければ、相変わらず、テロによる死、地震、紛争、戦争による死等の報道が引き続いてなされている。

さらに、少年による殺人事件、少女による同級生への殺人事件、等等など思い出せばきりがなく「死」の事件がこの数年の間に存在した。このような一般的な「死」は一人ひとりにとっては人事のように思える。そのような「死」はよく言われるように「3人称」の「死」である。「死」は「1人称」としての自分の「死」でないと人は実感がわかないのである。^(註1)しかし、これまた言われるように人の死亡率は100パーセントなのである。誰しもいつかは必ず死ぬ。その時を知らないだけである。ハイデガーが言うように人は「Das Sein zum Tode」（「死」への存在）なのである。^(註2)しかも人間は「死」が自分のものとして間じかに迫ると慌てふためき苦しむのである。^(註3)そしてキューブラ・ロスが言うように、自分の「死」について一定の段階を追って悩むのである。^(註4)

筆者には、上述したような殺人事件や子どもたちによる殺人事件の状況の中で何とか子どもたちに「いのち」の大切さを教えたいという思いが強くある。そして、これまでに「いのち」の大切さを教えてきた実践的な経過に加えて、「死」についても教える必要性があることを主張したいのである。

子どもたちの中には、死んでも生き返るという誤った考えがあることに気づくようになった。それは子どもが「死」についてよく知らないからである。現在の子どもは人の「死」を身近に体験していない。多くの人が今や病院で死ぬようになってから、子どもは「死」を身近に見ていないのである。又、動物を飼う機会も少ないし、身近に動物が以前程いないのも現実である。したがって子どもは動物の「死」をかつてほど身近に体験できないのである。

人はこれまでに人や動物の多様な「死」に触れながら生きてきた。そして自分もいつかは死ぬということをなんとなく身近に感じながら生きてきたように思う。しかし、近代文明は医学をはじめ、「死」は敵であるという考え方に傾斜し、「死」を排除してきた。そして「死」を忌み嫌うものとして対峙してきたのである。そのあげく更に一層人の「死」を遠ざけ、五感で認識出来やすい、物質や目に見える世界に心を奪われて生きているのである。仕事に逃げ、快適な暮らしに逃げ、ひたすら「死」から逃走しているのである。自分の「死」としての「1人称の死」が来ない限り現代人は今後も「死」から逃げ続けるので

あろう。そのような様相はエーリッヒ・フロムではないが「死からの逃走」と言ってよい。

筆者はこのような現代人の「死」に対する内実を見て取り、何とかして子どもに「死」について考える機会を設けたいと思う動機から「死」についての考え方を提供したいと思う。その提供する1つとしてキリスト教の「死」の考え方を探ることを本研究の目的としたい。主に聖書を分析することでその目的を果たしたいと考える。

ところで、前回筆者は以下の項目で小論を試みた。その項目を紹介しておきたい。

I. (はじめに) 問題の所在。1. 青少年の現状と今後の教育のあり方。2. 「いのちの教育とは何か。

II. 「生と死の教育の必要性」について。

III. キリスト教の死生観。1. 教育学研究としての位置。2. キリスト教の具体的な死生観の内容について。1) 「いのち」について。2) 「永遠のいのち」について。

IV. (おわりにかえて)。

今回は特にキリスト自身の「いのち」と「永遠のいのち」についての考え方について論じた。そしてその際に「いのち」と「永遠のいのち」は「死」と「死後」と「復活」との関連で考察しなければならないことを述べた。そこで今回の小論においては、その一つの内容としてキリスト教の「死」に焦点を当てて考察することにした。

II. キリスト教の「死生観」特に「死」の考え方について。

ここではキリスト教の「死生観」、特にキリスト教の「死」についての考え方を探る。

1. キリスト教の「死」について考える意味。^(註5)

何故キリスト教の「死」について考えるのかということについて先ず述べる。周知のようにキリスト教の「死生観」はこれまでに多くの人に大きな影響を与えてきた。死を恐れないでこの世を去って行った人。むしろ「死」を喜び感謝して去っていった人など、キリスト教が人々に与えた影響は大きい。「死」を恐れないで生きることが出来れば人生は苦しみとはうつらないであろう。勿論他の偉大な宗教も人々に影響を与えてきたことは言うまでもない。だが、ここではあくまでも今日も尚、人々の生きることの慶びをもたらすキリスト教の「死」について考え、その内容が子どもに何らかの参考になればよいと思う。そして、参考になったことが、一人ひとりのよりよく生きることにつながる事が出来れば嬉しい。

2. キリスト教の「死」についての基本的な考え方^(註6)

キリスト教の「死」についての考え方は細部にわたって、確固とした内容が一致しているわけではない。しかし、旧約聖書学者、及び新約聖書学者の間ではそれぞれキリスト教の「死」についての基本的な考え方はほぼ一致していると言えよう。一人の神学者の言葉を引用したい。J.ボウカーは次のように言っている。「キリスト教における死の理解は、十字架上で死に、神により死を超えた生へと甦ったイエスに対する友人たち及び仲間信

仰と特徴付けられる。」^(註7) この言葉はキリスト教の「死」を簡潔に表現している。キリスト教の「死」は一般的な人間の「死」というより、キリスト自身の「死」が人間の「死」にかかわることを言い得ている言葉である。ここでは「キリスト教の死」について多くの内容に言及はできないので以下の点に限定して述べておきたい。

1) アダムの死

キリスト教の「死」について先ず確認しなければならない点はなんと言っても旧約聖書の人間創造とアダムの「死」の問題である。

旧約聖書の「創世記」において神は天地創造の6日目に人を創造した。「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」(創世記1・26)^(註8)「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」(創世記1・27)とある。また「神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は生きものとなった」とある。(創世記2・7) 宇宙、地球、水、植物、動物の創造の後、神は人間を創造したのである。そして神はこの人間に次のように言った。「神である主は、人に命じて仰せられた。『あなたは園のどの木からでも思いのままに食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ』」(創世記2・16, 17)

これは神の人間に対する命令である。自由意志を与えられた人間が神の前に守らなければならない命令である。しかし、アダムはこの命令を破ってしまう。その結果神はアダムに「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」(創世記3・19)と宣言した。ここにみられるように「善悪の実」を食べたのでアダムが死に、人間に「死」が入ってきたのである。

2) 罪との関係について

キリスト教では人間に「死」が入ってきたのはアダムが神にそむいた罪が原因であるという考え方が基本としてある。

新約聖書「ローマ人への手紙」でパウロは「ひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、－それというのも全人類が罪を犯したからです。」(ローマ5・12)と言っている。このようにパウロは罪の結果死がすべての人に及んだと言っている。一人の人、すなわちアダムによって罪がすべての人間に入り、その結果「死」が人類に入ったというのである。アダム以来のすべての人が持っている罪を「原罪」と言う。この「原罪」をもつ人間に「死」が入ってきたのである。

Ⅲ.新約聖書の「死」についての考え方。

本稿では新約聖書の「マタイによる福音書」を基本とし、他のマルコ、ルカ、ヨハネ、他のパウロ書簡等をも用いて、「死」に関わる内容の理解を正確にしたい。

さて、新約聖書全体の「死」についての考えはかなり広く新約聖書の「死」の理解を正確にすることはとても困難である。そこでここでは主に、キリスト自身が「死」をどう考えて説いたのかということに的を絞って考察を試みる。

1. キリストとはいかなる存在か。

キリスト教はキリスト自身の「死」に大きな意味を持っている。^(註9) 旧約聖書全体がメシヤ、すなわち救い主の到来を語っており、キリストは救い主として自分が到来したと自ら言明しているのである。「イエスは彼らに言われた。『あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。』シモン・ペテロが答えていった。『あなたは、生ける神の御子キリストです。』するとイエスは、彼に答えて言われた。『バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。』」(マタイ 16・15～17)

もう1箇所引用しよう。十字架につく前にイエスは議会に連れ出された。そこで当時の長老会、律法学者、祭司長たちが次のように言った。『「あなたがキリストなら、そうだといいなさい。」しかし、イエスは言われた。「わたしが言ってもあなた方は決して信じないでしょうし、わたしが尋ねても、あなたがたは決して答えないでしょう。しかし、今から後、人の子は、神の大能の右の座に着きます。彼らはみなで言った『ではあなたは神の子ですか。』すると、イエスは言った。『あなた方の言うとおり、わたしはそれです。』』と言われた。」(ルカ22・67～70)

イエスは福音書の中ではあまり自分を「神の子」と表現していない。どちらかと言うと「人の子」という表現を多く用いている。(「人の子」という表現については後述する)

そうではあっても、イエスが自分が「神の子」であることを確信していることは間違いない。「わたしが天から下って来たのは自分のところを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみところを行なうためです」(ヨハネ6・38)「だれも神を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが父見たのです。」(ヨハネ6・46) このようにイエスは自分自身が父なる神から遣わされて世に来たと言っている。また、彼は「わたしと父とは一つです」(ヨハネ10・30)とも言っている。このように言うことによって、かれは間違いなく自分が神の子であり、神と一つであると言明しているのである。

ここでイエスはどのようにしてこのような神意識をもつようになったのかということに簡単に言及したい。神学者である藤巻充は「イエスの宗教体験」として次のよう説明している。「イエスの宗教体験は、自分は神の独一の子、すなわち、メシヤとしての体験である。このイエスの宗教体験こそ、イエスの宗教の根源である。」^(註10)「イエスの行為、態度から類推することの出来る宗教体験は、基本的には旧約聖書に記されている預言者の宗教体験と似たものである。相違している点は、預言者たちが神に代わって語るのに対してイエスが神の立場に自分を置いて語っている点である。」^(註11) このように言って、藤巻はイエスが神の立場にあることを述べ、イエスのいわゆる「神人説」を解き明かしているのである。

そして更に藤巻は宗教体験が、宗教意識(宗教的態度)になり、宗教的行動、宗教的教説となると言ってそれらの内容のつながりを説明している。^(註12)

2. キリスト自身による死についての言葉と考え方

先述したようにキリスト教においてはイエス自身の「死」が根本的な意味を持っている。そのことについては、イエス以外の使徒、弟子たちをはじめ現在の神学者、研究者が認めている。

筆者はイエスが神の子であることを上で述べたが、彼はいったい何のために世に来たのか。それは神から離れた人間を本来の姿、神との平和な関係に戻すためであった。神から離れたこと自体を聖書では罪と呼ぶ。その意味では人間を神から離れた罪から救うために世に来たと言ってよい。

このことを本稿の主題である「死」との関係で表すと、神から離れた罪の結果人間に入ってきた「死」を滅ぼすためにイエスは来たということが言える。聖書から幾つか引用しよう。「罪から来る報酬は死です。」(ローマ6・23)(ちなみに、新約聖書で用いられているギリシア語の「死」は「*θάνατος*—サナトス—」である。)

「あなたの方間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」(マタイ20・27～28) イエスはこのように言っている。

次に先に引用した箇所を再度引用したい。「そういうわけでちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に—それというのも全人類が罪を犯したのである」(ローマ5・12)

「すなわちアダムによって全ての人が死んでいるように、キリストによって全ての人が生かされるからです。」(コリント I 15・22)

ここにみられるように、人が罪を犯し、その結果人類に「死」が入り、その死の贖いのためにイエスはこの世に来た、ということが以上の箇所から理解できる。「罪」はギリシア語で「*ἁμαρτία*—ハマルテイアー—」である。もともとは「的をはずす」という意味である。神との関係がそれて的をはずして生きていると言う意味である。

さて、キリスト自身は「死」についてどのように言っているのか、そのことについて考察をしたい。結論から言うと福音書を読んでも彼は人間の「死」にほとんど言及していないことが分かる。彼が強調している「死」に関わる内容としては「神の国」「天の父」「ゲヘナ」「自分が殺されること」「自分のよみがえり」「死人のよみがえり」「再臨」「人の子」などが確認できる。今掲げた言葉はほぼ理解が出来るが、最後の「人の子」と言う語は理解が困難である。実はこの「人の子」と言う言葉は重要な意味を担わされてイエスによって用いられているのである。先に紹介した神学者のJ.ボウカーはこのことについて研究した結果次のように説明している。「人の子という言い方は、死と関わる文脈できわめて頻繁に用いられる。二つ目はダニエルについてで、(死や殉教にもかかわらず) 神への信仰を守り続け、神によって死のかたへと解き放たれたものたちの次世での姿を述べたものである。」^(註13) この言葉からも理解可能のようにイエスは「人の子」と言う言葉を用いることによって自分が殺され、しかし「死」から解き放たれて、復活する者であることを表現している。

そこで先ず、彼自身の「死」について論じよう。彼の「死」について聖書は次のように言っている。

「その時から、イエスキリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。」(マタイ16・21)

「彼らがガリラヤに集まっていた時、イエスは彼らに言われた。『人の子は、いまに人々の手に渡されます。そして彼らに殺されるが、三日目によみがえります。』」(マタイ17・22～23)

「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」(マタイ20・18～19。)

「確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去っていきます。」(マタイ26・24)

このようにイエスは、自分が殺され、よみがえることを述べ、その自分の死と関連して、自分の体、血が信じる者のために意味があることを次のように言っている。それは今日の教会でなされている聖餐式の内容である。「また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取って食べなさい。これはわたしのからだです。』また杯を取り、感謝を捧げて後、こう言って彼らにお与えになった。『みな、この杯から飲みなさい。これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。』」(マタイ26・26～28) キリスト教においては「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」(ヘブル9・22)とあるように、血を流すことによって罪が赦されることが旧約聖書時代から基本的に主張されている。また「キリスはただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。」(ヘブル9・26)とも記されている。キリスト自身の言葉を補足して紹介することにしよう。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲むものは、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」(ヨハネ6・54)

「わたしは良い牧者です。よい牧者は羊のためにいのちを捨てます。」(ヨハネ10・11)

「わたしが自分のいのちをふたたび得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛して下さいます。」(ヨハネ10・17)

「わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令を父から受けたのです。」(ヨハネ10・18)

キリストはこのように言って自分のいのちが殺され、そしてそれが人の罪からの救いになると説くのである。

ここで改めて考えたいことがある。それはキリストの死は単なる敗北ではないということである。彼は黄泉に下り、三日目によみがえって死に勝ったということである。このことについて、いくつかの聖書の言葉を引用しよう。

「最後の敵である死も滅ぼされます。」(コリントⅠ15・26)

「朽ちるものは必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、『死は勝利にのまれた。』としるされている、みことばが実現します。『死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。』」（コリント15・53～55）

「キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。」（テモテⅡの1・10）

「そこで、子たちはみな血と肉を持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つものを滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」（ヘブル2・14～15）

このような聖書箇所の内容からイエスが「死」に打ち勝ったという内容が理解できる。まさにイエスは人間の最後の敵である「死」を滅ぼしてくれたと、聖書は言う。この意味は大きい。人間は「死」によって滅びるのではないということが説かれているのである。また、聖書はイエスが再臨した後、死んだ全ての人がよみがえり、最後の審判があると説く。黙示録においては、いわゆる「第二の死」が起こるのである（黙示録20・14）キリストを信じた人はこの第二の「死」はもはや無く、「永遠のいのち」を生きるのである。この内容については「復活」と深く関わるので次回の課題として残しておく。

3. キリストの、「死」と「眠り」の考え方。

ここからはキリスト自身が「死」についてどう考えているかを「眠り」という言葉との関係で分析したい。彼の「死」についての一つの集約的な内容と言葉を紹介したい。

「ひとりの会堂管理者が来て、ひれ伏して言った。『私の娘がいま死にました。でも、おいでくださって、娘の上に御手を置いてやってください。そうすれば娘は生き返ります。』」（マタイ9・18）「イエスはその管理者の家に来られて、笛吹く者たちや騒いでいる群衆を見て、言われた。『あちらに行きなさい。その子は死んだのではない。眠っているのです。』すると彼らはイエスをあざ笑った。イエスは群衆を外に出してから、うちにおはいりになり、少女の手を取られた。すると少女は起き上がった。」（マタイ9・23～25）

この聖書の箇所はマルコの5章21節～43節とルカの8章40～56節にも書かれている。それらの内容を参照しながら、ここに集約されるイエスの「死」についての考えを分析をしたい。

ここで筆者が問題にしたい内容は24節の少女は死んだのではない「眠っているのだ」という言葉である。この少女はルカによると12歳くらいだと書かれている。マルコとルカによると父親であるヤイロは「私の娘が死にそうです」「死にかかっている」と表現されている。まだ死んでいなかったのである。ところがイエスはその少女の家に行く途中12年間長血を患っていた女性がイエスのところに来た。マルコ、ルカによると、イエスがその女性とまだそこで話しているときに会堂管理者の家から使いが来て「あなたのお譲さんはなくなりました。もう、先生を煩わすことはありません。」（ルカ8・49）と伝えた。そのときイエスは「その子は死んだのではない。眠っているのです」と言ったのである。ルカ

によると「人々は、娘が死んだことを知っていたのでイエスをあざ笑った。」(ルカ8・53)と書いてある。家から知らせにきた人は、ヤイロが指導者であり、会堂管理者である偉い人であることを知っていた。その偉い人に嘘をつくとは思えない。まして一人娘の人の死に関わることである。ギリシア語で次のように書かれてある。重要なので記しておきたい。「οὐ γὰρ ἀπέθανεν τὸ κοράσιον, ἀλλὰ καθεύδει」(「少女は死んだのではない。眠っているのです。」)^(註14)

イエスは死んだ少女を何故死んだのではなく「眠っているのです」と表現したのであるうか。イエスの「死についての考え」を理解するために重要な内容である。

実は「眠っている」と言う表現はヨハネ伝にもある。有名なラザロの復活の箇所である。死後4日もたっているラザロの箇所である。マリヤ、マルタの兄弟であるラザロについて姉妹はイエスに使いをやった。その使いは「『主よ。ご覧下さい。あなたが愛しておられる者が病氣です。』」イエスはこれを聞いて、言われた。『この病氣は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。』(ヨハネ11章3～4)と記されている。イエスはそう言ってなおもそこに二日留まり、その後ユダヤに行った。その間にラザロは死んだ。そのような状況の中でイエスは言った。

「『わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。』」そこで弟子たちはイエスに言った。『主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。』しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。そこで、イエスは、そのとき、はっきりと彼らに言われた。『ラザロは死んだのです。わたしはあなたがたのため、すなわちあなた方が信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。さあ、彼のところに行きましょう。』(ヨハネ11・11～15)

「そして、イエスはそう言われると大声で叫ばれた。『ラザロよ出て来なさい。すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。』(ヨハネ11・43)

先の少女とラザロの死との共通点が存在する。その1つは、二人ともまだ死んでいないときに、病氣であるとイエスに伝えられたということ。二つ目には二人に対して「眠っている」という表現が使われているということ。三つ目には、二人とも死から生き返ったということである。これらの点について考えたい。

まず、何故イエスは死なないうちに病氣を治さなかったのか。他のところでは、12年間も長血を患った人を癒したりしているのである。何故イエスは、少女やラザロを直ちに癒しに行かなかったのか。その答えは先に引用した箇所に示されている。つまり、「神の栄光ためである」。ここでは「栄光」はギリシア語の「δόξαー」ドクサー」という語が用いられている。「栄光」とは神の臨在、ないし臨在の内容と考えてよい。そう理解した上で次の言葉から学びたい。聖書学者である榊原康夫は「眠っている」という表現について次のように言う。「どういう意味で少女は眠っていたのでしょうか。それは、めざめるために、起き上がるために、生き返らせるイエスのみ業が行われるために、眠っている、という意味です。死は彼女の人生の終わりではなかった。決定的瞬間も、彼女をこの世の人々から永久に断絶しはしなかった。彼女はなくならなかった。むしろ死において神のおおきな業に役立とうとしている。」^(註15)

ここからも学ぶことは人の「死」は神の手の中にあるということである。そして神のみ業が人の「死」の上に表れるということである。少女もラザロも神のみ業に用いられるかどうかで、人生の意味が変わるのである。榊原も言うように人間は生きているときも、死ぬ間際においても、死んだ後でさえも、その人自身の存在が神によって意味あるものとされるのである。生も死も人間中心の現代においては、このような思想は受け入れられないところである。しかし、イエスは他のところで次のように言う。「あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。」(マタイ6・27)と。考えてみれば私たちは、生まれるときも、死ぬときも自分では決められないのである。そう考えるとあながち、人の死が神の手のなかにあるという考えも間違いであるとは言いがたい。

さて、ここで、「眠っている」と言う表現について考えたい。「眠る」はギリシア語では「καθεύδω-カシュードー」である。イエスは神にあって「眠り」に意味があるということを示すために「死」ではなく「眠り」と言う表現を用いたのである。事実イエスが「タリタ クミ(「少女よ、あなたに言う、起きなさい」)(マルコ5・41)と言うと少女は起き上がり、歩きはじめたのである。同様にラザロに対しても「ラザロよ出てきなさい」と言うラザロは出てきたのである。ここでもイエスはよみがえりを信じないラザロの姉妹に対して「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見るとわたしは言ったではないか。」(ヨハネ11・40)と言っている。

この「眠り」と言う表現は聖書の他のところでも用いられている。復活したキリストについてパウロは「その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠ったものもいくらかいます。」(第一コリント14・6)と記している。また、死者のよみがえりに言及する箇所「もし、キリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。」(コリントⅠ15・17～18)ここでも死んだ者を「眠った者」と表現している。パウロはここではキリストにあって死んだ人たちは完全に滅んだのではないことを示している。このことは復活について正確に知ること無しには理解は困難である。だが、先の少女やラザロの記事と同じように死んだ者も神の手の中にあり、死んで眠ったものも復活の時まで眠っているということが黙示録や他の聖書の中から理解することができる。ここにキリスト教の「死」についての独自性がある。人間は死んでしまって滅びる存在ではないということである。

ここにいたって、神によって生きる生のありかた、神によって死ぬ死のあり方を知るとき、やはり、生も死もその両方において神によって意味が与えられるということを知ることが出来るのである。したがって「わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。」(ローマ14・8)と言えるのである。また、「わたしにとっては生きることはキリスト、死ぬこともまた益である。」(ピリピ1・21)とも言うことが出来るのである。

キリスト教の「死」は、生きることと、死ぬことと復活とが関わりあっており、いずれも神の手の中で導かれているということが出来る。

さて、少女とラザロの共通点である、第3番目の少女とラザロが甦った内容についてだが、今回は省略する。なぜならば「甦り」「復活」はこれまた、キリスト教の重要な死活問題であり、そう簡単に論じる内容ではないからである。「神のくに」「ゲヘナ」「死後」の問題とともに次回に譲ることにしたい。そこで、今回は復活との関連について説いているキリスト自身の言葉のみを紹介することにしよう。

「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じるものは、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。』」(ヨハネ11・25～26)

「わたしはいのちのパンです。あなたがたの先祖は荒野でマナを食べましたが、死にました。しかし、これは天から下ってきたパンで、それを食べると死ぬことがないのです。」(ヨハネ6・48～50)

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死をみることはありません。」(ヨハネ8・51)

「いのちを救おうとする者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです。」(マタイ16・25)

ここまで、キリスト自身の「死」の考え方をみてきた。彼の死の考え方は一般的に常識とされる考え方とはかなり異なる。しかし、だからといって彼の考え方を常識で否定することは正しくない。彼自身が復活して死に勝利し、復活して多くの人に表れてそのことを証したことを真剣に考えることは一つの許される態度と言ってもよいと思う。聖書の考え方が学問的にも問題が無いことを、神学者としてK.バルトは論理的に、学問論として論じている。少々多いが彼の言葉を紹介しよう。

「他の諸学問は、まさに神学の課題を、事実上、自分自身の課題として承認し、取り上げなかった。(中略)歴史家、教育学者等は、とりわけまた哲学者は、彼らがよい意思にあふれてこの主題と(筆者注一神学の学問性について)取り組むところでも、彼らの学問の枠の中では、ここにある学問を、くり返し素通りしつつ語るのである。すなわち、教会の語りに固有な原理、(Prinzip)に従ってではなく、むしろ、それに疎遠な原理に従って、神についての教会の語りを判断する。」^(註16)「学問的な神学の課題は、別の諸学問によって、事実上なされていないところの(神についての、語りの、教会に固有な原理の基準に照らしての)批判と訂正である。神学は、自分自身に対して最後のにはこの課題を、ただこの課題だけを、課するところの、そして人間的な真理探究のすべてのそのほかの可能な課題をば、この課題に従属させ、その下に置くところの学問である。」^(註17)「神学はそもそも一つの『学問』であるかという問いに関しても事情は同じである。この問いは、決して神学にとって死活問題(Lebensfrage)ではない。なぜと言って、神学に、是が否でもまさに学問というこの仲間[類](genus)に属することを要求する契機を与え得るであろういかなる原理的な必然性も、いかなる内的な根拠も、そこにはないからである。むしろ、すべての形で、そのようなことを断念すべき、あらゆる契機があるだろう。」^(註18)「神学には、ほかの諸学問の前で、自分を弁明しなければならない義務はない。特に、神学は、偶然にあるいは偶然でなくてもよいが、一般に通用する学問概念の要求に屈服するということを通して、ほかの諸学問の前で、自分を弁明しなければならない義務は全然ない。」^(註19)「神

学には、神学の対象を通して規定された、自分の認識の課題と取り組んでの作業に従事しながら、まさしく神学が『学問性』(Wissenschaftlichkeit)ということと理解しているところのことを実際にしてみせること以外に、自分の『学問性』を証明する可能性はない。いかなる学問も『学問』という名を貸す権利をもっていない。そしてまた、この学問という肩書きを最後法定的な全権を持って与えたり、拒んだりすることのできる学問理論というものは世に存在しない。」^(註20)

以上、少々引用が多い嫌いがあったが神学はその性格上、独自に自分の課題を探究することで学問的な責務を果たす、ということが確認できた。本研究のイエスの「死」の内容も先述したように一般的には承認されがたいように思えるが、神学という学問性の中から来る内容であること知って理解したい。

IV. おわりにかえて

これまでに筆者はキリスト教の死生観をキリスト自身の「死」の考え方を中心にして考察した。これらの内容をどう教育に結びつければよいのが今後問われてくる。最初に述べたように筆者のねらいは、子どもたちに多様な「死」についての考え方を提供し、考えるきっかけを与えたいということである。そして、「死」を考えることによって、生きることに前向きになり、希望をもつことが出来るようになってほしいと願う。そして、生きているときに出来る限り人に仕えることが出来るようになってほしいとも思う。このことは筆者の個人的な願いである。教育学の研究内容としてはもっと具体的なレベルが要求されることではある。今後追求したい内容はおおよそ次のようなものになるであろう。

例えば、死への準備教育について、A.デーケン¹⁾は四つのレベルがあると次のように説明している。今後の追求内容に参考となると思うので紹介したい。1. 専門知識の伝達のレベル(知識のレベル) 2. 価値の解明のレベル(価値観のレベル) 3. 感情的・情緒的な死との対決のレベル(感情のレベル) 4. 技術の習得のレベル(スキル・トレーニング)^(註21) この段階に今回の研究内容を当てはめると、第1, 2の段階に相当すると思う。いずれ、このような段階に沿った教育内容と実践に繋げてまとめられれば良いと思う。

(注)

1. 柳田邦男『犠牲』文藝春秋 1995. 柳田は「1人称の死」は自分の死であり、「2人称の死」は親子や兄弟姉妹、など身近な人の死であり「3人称の死」は第三者から冷静に见ることが出来る死であると説いている。P.204.
2. ハイデッガー 細谷貞雄, 亀井裕, 船橋弘共訳『存在と時間一下巻』理想社1969. P.15.
3. 森岡正博『無痛文明論』トランスビュー 2003. この著書で森岡は死の恐怖を5点上げている。1. 「持続する私」が切断されときの恐怖。2. 「私の世界」というあり方が消滅してしまうことの恐怖。3. 「回顧的な私」といあり方が消滅してしまう恐怖。4. 「永遠の無」の恐怖。5. 「連れ去られてゆく無慈悲さ」の恐怖。p.p301~312. 他に『生命観を問い直す』筑摩書房 1994. 『現代文明は生命をどう変えるか』法蔵館

1999.『生命学何ができるか』勁草書房 2001. を参照。

4. キューブラ・ロスは自著、川口正吉訳『死ぬ瞬間』読売新聞社 1969. のp.59～204
の中で「死へのプロセスの五段階」① 否認 (denial) ② 怒り (anger) ③ 取引 (bargaining) ④ 抑鬱 (depression) ⑤ 受容 (acceptance) について解説
をしている。
5. 熊澤義宣『キリスト教死生学論集』教文館 2005. この中で神学者である熊澤は「神
学的死生学」の必要性和性格について論じている。
6. 宮谷宣史編『死の意味—キリスト教の視点から』新教出版社 1994. 宮谷はこの本の
第1章で「死の意味を問う意味」について論じている。特にキリスト教の立場から4点
に分けてキリスト教の死についての基本を論じている。
7. J.ボウカー 石川 都訳『死の比較宗教学』玉川大学出版部 1998.P.89.
8. 聖書の引用箇所については本文の中に記すことにする。旧約39巻、新約27巻の中の名
称と章と節を記す。マタイの福音書1章2節は「マタイ1・2」等のように記す。聖書は
『新改訳聖書』日本聖書刊行会 1970. を用いる。
9. 大林浩『死と永遠の生命—そのキリスト教的理解と歴史的背景—』ヨルダン社 1994.
大林はこの本の第1部の中でキリスト教の死生観の推移について、旧約聖書から現代ま
でを論じている。また、第2部では、「創造と死」「罪 (被害者と加害者)」「十字架と死
(赦す力)」「死と歴史的な生 (此願的な超越)」「死と復活の意味」「死と永遠の生命 (人
格の価値)」について詳しく論じている。また、村上伸編『死と生を考える』ヨルダ
ン社 1988. この中で村上は「新約聖書における死の意味」に論及している。
10. 藤巻充『キリスト教の起源—歴史のイエスと原始キリスト教団成立への一考—』日本
ホーリネス教団出版局 1998. p.188.
11. 同前書 p.189.
12. 同前書 p.187.
13. J.ボウカー 前掲書 p.93～94.
14. 小論で引用するギリシア語とギリシア語の文は次の聖書による。『The I—
nterlinear Bible—Hebrew—Greek—English』With Strong's Con—cordance
Number Above Each Word. JayP. Green. Sr.General Editor
andTranslator. HENDRICKSON PUBLISHERS.1976.
15. 榊原康夫『マタイによる福音書Ⅲ』みくに書店 1965. p.48.
16. K.バルト 吉永正義訳『神の言葉Ⅰ／1序説／教義学の基準としての神の言葉』新教
出版社 1995. P.11.
17. 同前書p.12.
18. 同前書p.13.
19. 同前書p.15.
20. 同前書p.19.
21. A.デーケン『死を教える』メチ"カルフレンド社 1986. P.3.